The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜特集論文＞イメージの人間学／人類学
Author(s)	三木, 順子
Citation	形象. 2019, 4, p. 12-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集論文

イメージの人間学（アンソロポロジー）／人類学

形象論研究会では、二〇一八年二月二十三日に、特別公開研究会「イメージの人間学／人類学（アンソロポロジー）」を開催した。そこでの議論をふまえ、『形象』四号では、公開研究会と同じテーマの特集を組み、仲間裕子氏と森田團氏に寄稿いただくこととなった。

「人間とはなにか」を一つの独立した問いとして掲げたのは、十八世紀のカントであった。この問いは、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ニーチェやディルタイ、ベルクソン、ジンメル、クラーゲスらのいわゆる「生の哲学」の流れをとおして、因習化した社会や陳腐化した道徳や鼻持ちならない俗物になりさがった教養による支配を退け、いかにして生命というものの自由で創造的な展開を実現するのかという問いとして引き継がれていった。さらに、その自由と創造性こそが、人間という有機的生命体をほかの有機的生命体である植物や動物から分かつ裂け目であるとし、宇宙のなかで人間が果たすべき役割と責任はなにかを尋ねる新たな学問ジャンルとして人間学を提唱したのが、『宇宙における人間の地位』（一九二八）で知られるマックス・シェーラーであった。シェーラーは、人間学が、発掘調査やおのおの民族の行動分析によって人間の文化的な生の起源とその多様な変遷を辿ろうとする文化人類学とは異なり、普遍的な意味での人間を問う学であることを強調し、人類学から区別して「哲学的人間学」と呼んだ。この哲学的人間学は、ヘルムート・プレスナー、オットー・F・ボルノウ、アーノルト・ゲーレンやハンス・ヨーナスらによってさらに展開される。

だが、やがてこの人間学は、哲学の内部から厳しく批判されることとなる。宇宙のなかで特権的な地位を占め、植物や動物に対して優位に立ち、いまや現実を自由自在に書き換え創り変えるテクノロジーを手にした人間は、しかし、いかにして自分自身と距離をとり、自分自身を客観化し、自分自身を制御することができるのか。批判の矛先は、哲学的人間学が、この倫理的な課題をまさしく人間に固有の課題として意識しながらも、うまくそれに応えきれていない点に向けられていた。普遍的な人間について問うことはできず、人間についての探求は、結局は人類の多様性と相対性に即してその都度の個別研究をとおしてなされるよりほかないであろう。こ

うした考えかたが一般的なものとなり、今日ではアンソロポロジーという用語は、人間学ではなく人類学の文脈において語られるのが常となっている。

では、なぜ本特集で、問題含みの学であるこの人間学をいまさらながらに呼び出し、しかも、イメージ論としての「人間学／人類学（アンソロポロジー）」をテーマに掲げるのか――。その理由をここで示しておくこととしよう。

十九世紀から二十世紀の初頭にかけて、つまり、生の哲学の流れを受けて哲学的人間学が提唱された時期は、実証主義の科学がすでに大きな成果をあげ、マッハやヘルムホルツの生理学をとおして、人間の知覚や認識のメカニズムが次々と解明されていく時期でもあった。発生学や病理学の観点からダーウィン的な進化論の読み直しが図られ、有機的生命体としての人間の発生と成長のプロセスが細かに呈示されていった。人間についての知識は急激に多様化し、増大していく。重要なのは、このような動向にもっとも直接的に寄与したのが、発達するメディア・テクノロジーを用いて人間自身が描きだしていった種々のイメージであった点である。例えば、レントゲンによるX線の発明によって、これまでは医学者だけが目にする特別な領域であった生きた人間の身体の内部までもが、外側からの遠隔操作によって可視化され、多くの人びとに共有されるようになった。しかし、増大する知識とイメージの陰で、「人間とはなにか」というカント以来の哲学の問いが、ともすれば、みずからの方法と意義を見失いかねない状況に陥っていたことを見逃してはなるまい。シェーラーが提唱した哲学的人間学は、哲学にとって、人間というものがますます自明のものではなくなったことに対する深い危機意識から生じてきたものにほかならない。その危機意識のなかには、イメージへの批判がおのずと内包されている。

そこから百年近くを経た今日、一方では、プルーラル、ダイバーシティ、リレーショナル、インクルーシヴ、コレクティヴ、グローバルなどという標語のもとに、人間なるものを、その曖昧さのままに難なく包摂できるかのような安易な言説が蔓延している。また一方では、人間性の歴史にもはや見切りがつけられ、ポストヒュー

マンとしてのわれわれの在り方が云々されてもいる。いまや、「人間とはなにか」という問いの存立そのものが危ぶまれているといっても過言ではなかろう。かつてシェーラーらが感じ取った危機の影は、いっそう深い闇をとなって、時代のエートスを呑み込んでいる。こうした時代を生きる者に必要なのは、二十世紀の哲学的人間学とは別の仕方で、つまり、人間の自由やほかの存在に対する優位性ではなく、むしろ、人間の不自由さや限界にアクセントを置きながら、人間自身の不透明性や不確かさのもつ意味を省みることではないだろうか。イメージ論の文脈でいうならば、人間を、イメージを自由に生みだし操る主体として前提することをやめ、人間とイメージの関係を、別の視点で一から問い直すことが必要なのである。

そう考えるならば、ここ二十年のあいだに展開してきたイメージ学 Bildwissenschaft が、人間ではなくイメージの側に行為主体としての自発性を見ようとしていることは示唆的だといえよう。例えば、イメージ学の提唱者の一人である美術史家ハンス・ベルティンクは、人間を、イメージがそこにやってくる宿り木のようなものとみなしている。ベルティンクが、宿り木としての人間の受動性を、夢をみている人の無意識になぞらえるとき、念頭に置かれているのはいうまでもなくフロイトである。すでに一九三〇年代に、フロイトの無意識に共鳴し、みずからは経験していない「歴史」を想起する人間のまなざしを、個人という経験主体を超えた次元の主体性というアポリアのなかに探りだそうとしたのが、ヴァルター・ベンヤミンであった。本特集は、ベルティンクとベンヤミンというキーパーソンをそれぞれ主題とする二つの寄稿論文で構成されたものである。

［三木順子］